ロシア・ウクライナ紛争下におけるユダヤ・ファクターの変遷

赤尾光春（国立民族学博物館）

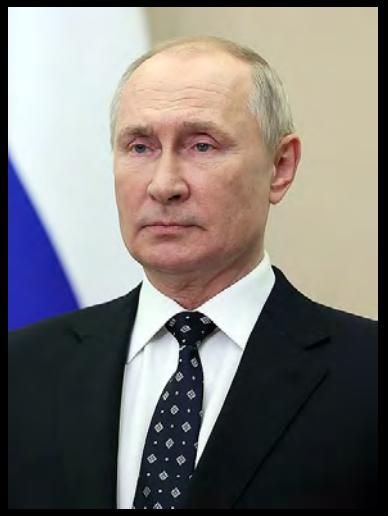
ゼレンスキー大統領の出自をめぐるロシア政府高官の発言

ラヴロフ外相

「ヒトラーにもユダヤ人の血がありました。でも、それはまったく意味をもちません。賢いユダヤ民族によれば、最も熱狂的な反ユダヤ主義者は得てしてユダヤ人なのです。「どの家庭にもならず者はいる」と言われるように」（2022/5/1：イタリアのＴＶのインタビュー）

メドヴェージェフ**安全保障会議副議長**

「疲れ果てたこの国の現大統領は、特定の民族的ルーツを持ち、生涯を通じてロシア語を話してきた人物である。…にもかかわらず、一国の指導者になった瞬間から、…第二の「マイダン」の標的になることを恐れて、政治的・道徳的方針を一変させた。要は、自身のアイデンティティを放棄したのだ。彼は、ウクライナの最も凶暴な民族主義勢力にうやうやしく仕え始めたのである」
（2021/10/11：『コメルサント』誌）



プーチン大統領

「ロシア人を非先住民族として語るのは、単に不正確なばかりか、お笑い種だし馬鹿げている。…じゃあ、混血の人たちはどうなる？　ゼレンスキーは民族的にはユダヤ人だ。こういった人たちはどうなる？　ナチス・ドイツでなされたように、今や彼らはコンパスで頭蓋骨を測られて決められてしまうことだろう」（2021/6/7：露メディアへのインタビュー）

ユダヤ人コメディアン、ウクライナ「国民のしもべ」になる

1978 ドニプロ（ペトロウシク）州クリヴィ・リフ生まれ

1995～ＫＶＮ（愉快で機知に富んだ者たちのクラブ）参加

1997 ウクライナ代表チームＫＶＮで優勝、「クヴァルタル95」結成

2003～クヴァルタル95、ＴＶ進出

2015～19 ＴＶドラマ＆映画「国民のしもべ」出演

2018.3 政党「国民のしもべ」結党⇒大統領選立候補表明（12.31)

2019.4.19 第６代ウクライナ大統領に選出

世界史における著名なユダヤ人政治家

ディズレーリ

ベンジャミン・ディズレーリ：英国首相（1868, 1874-1880）英国国教会に改宗

・ワルター・ラーテナウ：独ワイマール共和国外相（1922）右翼青年に暗殺

・レフ・トロツキー（ブロンシュテイン）：軍事人民委員／赤軍総司令官（1918～25）スターリンとの権力闘争に敗れ、29年に亡命、40年にメキシコで暗殺

・レオン・ブルム：フランス閣僚評議会議長（1936-37、38）、首相（1946-47）

・ヘンリー・キッシンジャー：アメリカ合衆国大統領補佐官（1969-75）、国務長官（1973-77）

※『旧約聖書』のヨセフ以来の「ナンバー2」の伝承（ナンバー１はタブー）
※離散（ディアスポラ）ユダヤ社会における「仲介者（シュタドラン）」の系譜

ラーテナウ

トロツキー

ブルム

キッシンジャー

ウクライナの歴史とユダヤ人

1648 フメルニツキの乱（～1658）→ユダヤ人の「フルブム（大破壊）」として記憶化

1768～69 「コリフシナ」（槍の蜂起）→ウマニの虐殺

1881～17 帝政ロシアにおけるポグロムの頻発

1918～21 ロシア内戦時にポグロム多発（白衛軍およびペトリューラ率いるウクライナ独立派勢力による）の頻発

1941～45 ウクライナ西部でポグロム、ナチスの協力者としてのウクライナ人（バンデラ率いるＯＵＮ、シュヘーヴィチ率いるＵＰＡ）

【特徴】中央集権的な国家不在のため、敵対勢力間の紛争時にユダヤ人が犠牲になりやすい。

※「ユダヤ＝ボリシェヴィキ」神話の蔓延。「ユダヤ・モスクワ人」「ロシア・ユダヤ・マフィア」等の揶揄

「ウクライナ建国の父」フメルニツキ

リヴォフ（リヴィウ）ポグロム（1941）

マイダン革命におけるバンデラの賞揚

現代ウクライナ政治とユダヤ人

［ユダヤ人人口（2020）］推定4万5千人（世界第14位）

・ユダヤ系オリガルヒの存在感：ピンチュク、コロモイスキー、ボヴォリュヴォフ⇔アフメトフ（タタール系）：「アフメトフがユダヤ人でなくてよかった」

2013〜14 ユーロ・マイダン革命：極右民族主義の台頭？

2013.3 コロモイスキー、ドニプロ州知事就任（2015 解任⇒国外へ逃亡）

2014.5 大統領選：ポロシェンコ選出（極右候補は泡沫）

2014.5 アゾフ大隊創設（ネオナチ疑惑、コロモイスキーの資金援助）

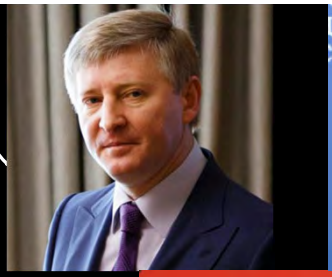
2015.5 「脱共産主義法」可決⇒独立闘争の「英雄」の復権

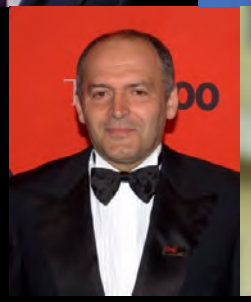
2019.7 ウクライナ総選挙（極右 4 団体は泡沫：比例区で約2％得票）

2019.4 ゼレンスキー大統領選出⇒市民的原理に基づく国民的統合の象徴？

※欧州の反ユダヤ主義に関する世論調査：ウクライナはユダヤ人に最も寛容であるとの結果

※「ユダヤ人大統領」への懸念は杞憂に





ロシアの歴史とユダヤ人

13〜16世紀 モスクワ公国はユダヤ人の入国を禁止
18世紀末 ポーランド分割⇒「ユダヤ人居住区」設置
1825〜55 ニコライ1世時代に対ユダヤ人差別法の導入
1881〜 ポグロム（1917年まで帝政当局がポグロムを誘発・扇動）
1882 五月法（対ユダヤ人差別法の復活）
1920〜30年代 世俗イディッシュ文化の保護／ヘブライ語禁止・ユダヤ教弾圧
1948〜52 イディッシュ文化の弾圧（著名な文化人13名銃殺）
1953 医師団事件
1967 第三次中東戦争⇒イスラエルと国交断絶⇒反シオニスト・キャンペーン
1991 ソ連崩壊⇒言論の自由化で反ユダヤ主義的言説が激増⇒ユダヤ人の大量出国
【特徴】中央集権体制、国家主導型の反ユダヤ主義、対ユダヤ人政策は国家元首の意向に左右されやすい
※ユダヤ人のイメージ：「国家内国家」⇒「コスモポリタン」「根無し草」「欧米のエージェント」etc.

プーチンとユダヤ人

◆少年時代のユダヤ人との親交

・アパートの隣人夫婦の思い出

・高校のドイツ語教師（Ｍ・Ｙ・ベルリネル）

・柔道の師範（Ａ・ラフリン）

◆ユダヤ系オリガルヒの明暗

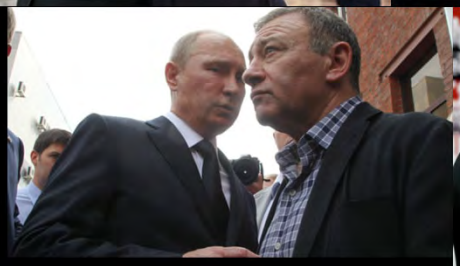
・アルカージー＆ボリス・ローテンベルク兄弟

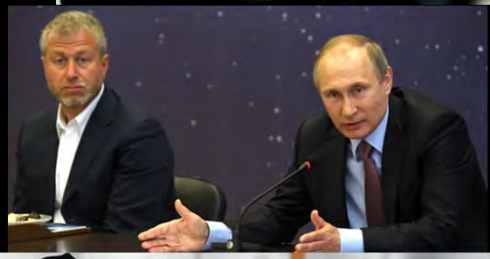
・「石油王」Ｒ・アブラモヴィチ

※2000年代初頭、ユダヤ系の有力オリガルヒ（ベレゾフスキー、「メディア王」グシンスキー、「石油王」ホドロコフスキー）らを打倒し権力基盤を固めた。

◆ユダヤ教ハバド＝ルバーヴィチ派の保護

・ラビ・ベルル・ラザル（「プーチンのラビ」）





プーチン政権下におけるロシア・ユダヤ・イスラエル関係

［ユダヤ人人口］推定15万5千人（世界第8位）

2000年代 ロシアの陰謀論の矛先は「ユダヤ人」⇒「西側」へシフト

2005年、イスラエル初訪問

ネタニヤフ政権下における二国間関係の強化

イスラエル：ロシアのシリア上空支配・核開発を進めるイランへの影響力

ロシア：イスラエル在住のロシア語話者との関係

2012 モスクワに「ユダヤ博物館と寛容センター」建設

※ユダヤ人に対する偏見から免れた国家元首との評判

※プーチンの采配がロシア国内の反ユダヤ主義の抑制に貢献？

開戦以降のユダヤ・イスラエル・ファクターの推移（ロシア篇）

［ユダヤ人の流出（９月現在）］ロシア・ベラルーシ⇒イスラエル：約２万8千人

・「プーチンのラビ」ラザル、停戦の呼びかけ（3月）⇒沈黙

・ユダヤ系オリガルヒの動向：Ｍ・フリードマン、デリパスカは反戦表明／アブラモヴィチは停戦交渉に関与⇒毒殺疑惑

◆ロシア・イスラエル関係

※イスラエル：対ロ制裁不参加の原則／仲介の努力

2.28 国連総会：対露非難決議　←　イスラエル賛成

3.13 ラピード外相が対露非難

4.7 国連人権委員会：露資格停止決議　←　イスラエル賛成

7.27 露司法省：ユダヤ機関閉鎖決定に関する予備審問（二度延期）

10.13 国連総会：露の一方的併合に関する決議　←　イスラエル棄権

11.1 イスラエル総選挙⇒ネタニヤフ率いる野党の勝利（組閣中）

11.11 国連総会第四委員会：国際司法裁判所にイスラエルのパレスチナ占領への介入を促す決議　←　ロシア賛成

11.25 国連総会の露の賠償に関する決議　←　イスラエル棄権

開戦以降のユダヤ・イスラエル・ファクターの推移（ウクライナ篇）

［ユダヤ人の流出（９月現在）］ウクライナ⇒イスラエル：約１万３千人

◆ウクライナ・イスラエル関係

イスラエル：武器供与しない原則／人道面に限定した援助の原則

3.20 ゼレンスキー大統領のクネセット演説⇒不評

4.20 ヘルメットと防弾チョッキの供与を決定

7.3 イスラエル最高裁：ウクライナ避難民の割り当て制を廃止

９～１０月 露のイラン製ドローンの使用発覚⇒イスラエルがウクライナと関連情報を共有／イスラエル製対ドローン防衛システム、ポーランド経由でウクライナに供与？

10.24 ガンツ国防相→レズニコウ国防相：イスラエルの武器供与行わぬと表明

11.11 国連総会第四委員会：国際司法裁判所にイスラエルのパレスチナ占領への介入を促す決議　←　ウクライナ賛成

11.25 国連総会の露の賠償に関する決議　←　イスラエル棄権

おわりに

①ウクライナ社会・政治の成熟

2014年以降、ウクライナの二つのタイプのナショナリズム（エスノセントリズムＶＳ市民的原理に基づく国民統合）の相克→ユダヤ系大統領の登場は後者の流れを汲み、かつ、それを促進

②クレムリンのレトリックの倒錯と戦略ミス

※開戦直後、プーチン大統領、ウクライナ軍部に「ネオナチ」政権打倒を呼びかける→ウクライナ極右民族主義者の反ユダヤ主義に期待？

・「ネオナチ」との闘いという仕草のグロテスクな流用→意味作用の無効化

・脆弱なユダヤ人元コメディアン政権という誤算？

③イスラエル・ファクターの基本的不動性

・ユダヤ系大統領への配慮は一切なし（非シオニストへの冷淡さ？）

・国防至上主義ゆえのイスラエルのタブー→対露関係以上に対イラン軍事戦略を重視？（ネタニヤフの最近の発言：「一つの戦場で我々が供給した武器がイランの手に渡って我々に対して使用されることが何度も起きてきた」）

④ウクライナの見本としてのイスラエル？

※ゴルダ・メイル（第五代イスラエル首相）へのリスペクト

※ゼレンスキー：戦後のウクライナは「大きなイスラエル」のようになる（リベラルな国防至上主義国家）